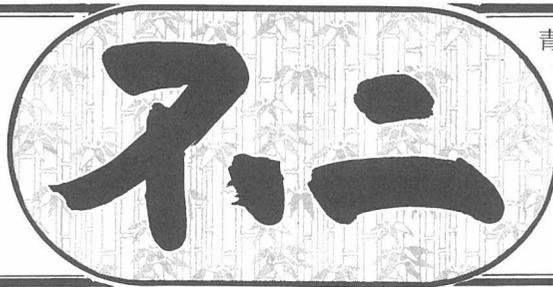


主 な 記 事

毒 語
現代への提言
この人この道
江原通子
会のもの方
生き生き寺院



青年僧よ 立ちあがれ、歩め!!

発 行 所
臨 濟 宗 青 年 僧 の 会
発行人 藤 原 東 演
〒420 静岡市御幸町11の4
TEL 0542-51-1312
〒振替 横浜 2-16960

野納は岐阜市の百姓の出身であります。代々僧侶になる習慣があったのです。

父参二の次男であったので、僧侶になったのです。それも小学校へ上らぬ前と云うので、七才になるとすぐに、叔父が住職していた東福寺塔頭靈源院の小僧になりました。頭は丸坊主で、言葉が岐阜弁なので同級生が寄つてたかつて坊主坊主とからかわれた。

負けん気で、それ等に泣きながら立向って行った。東福寺の山内には小学生が十人程が居り、殊に一年の同級生が三人居って、その三人が協同作戦を取って戦つたためにいじめは止つた。

たゞ困つたのは本山の出頭のため、毎月一日十五日、それに開山忌の三日の日は一時間、二時間と遅刻をせねばならぬ事であった。

当時は本山の塔頭が二十五ヶ寺あつたが山内出の児童は一人も居らなかつた。何れも在家からの出身であつた。婆阿(バーヤ)が居つたけれども子供が生める年の者は一人も居らなかつた。其時期に思い切つて嫁をもらひ正式に結婚をしたのは善慧和尚であつた。随分抵抗はあつたが敢然として結婚をし、子供をこしらえたのである。わが師匠靈源和尚も大阪から嫁をもらつた。それが相場師の娘であつた。この事がやがて山を出な

ければならないことになつたのである。所謂「株屋」の義父を持つたわけである。その影響があると思われるのである。本山へ出仕して財務部長になつた靈源和尚は、本山の債券を抵当に「株」をやつた。この事はやがて本山の知る事になつて、住職を剝奪し、地方への住職の転住と云う事になつたの



た。善慧和尚の奥さんには一言も云つてないのである。時は十二月の寒い日であつた。

「おい、小僧をうちへおく事にきめたぞ」何にも知らない奥様はポカンと口をあけておつた。その当時善慧院はビタ銭一文善慧(銭ネー)院と云はれ、檀家は十軒余り、山内で一番の貧乏寺で、奥様

である。その出発の日に立会人になつたのが、善慧院住職爾以三師であつた。岐阜の父、参二も来て居つた。其の時中学一年であつた私を岐阜へ連れてかへると云う。それに抵抗したのは自分であつた。今の中学校へ続けて行きたいと云う。それを見て「守宏さん、うちへ来るか」と。中学校へ続けて行けるならと。それからが大変だつ

と女の兄が二人であつた。朝は六時に起きる、顔を洗つたら本堂で朝課をよめ、それから掃除、それが済んだら、弁当をつめて学校へ行く。学校が終つたらすぐに帰つて庭の外掃除、明るい間は寺の仕事をし、勉強は晩食の後ねるまで、それには別に不服はなかつた。寺によつては夜学に通っている者もあつたのである。奥様からは弁

当は自分でつめる事、冷飯から食べる事、塩こんぶが弁当のおかずである、勿論飯は麦めしである。これ等は外の寺でも同様であつたから文句はなかつた。所が冷飯に茶漬にして食べるのに薬かんの湯が沸湯しておらぬ、一杯入れてあるので、これを半分程にしておく早く沸湯するのである。奥様が薬かんに水を一杯入れてあるのを半分程捨てると早く沸く、この事を発見して、それを実行してよい気になつて三日月に、和尚から云はれた。お前は生ぬるいお茶では朝食は食えぬのかと、仕方がないと諦めた。それから十日程してから晩食の後、紙に包んだ五円札を出して、これはどうした金だ。ハツ、と気づいたので。これは田舎の父がこちらに御世話になる時に、決して無駄使ひしてはならぬぞ、どうしても必要な時に使う様に、と渡してくれたものです。と云うとニッコリ笑つて、この金はわしが預つておく、必要な時は出してやると。それ迄はだまつていた奥様が、駄目です、これは鑑札のお金です。虚無僧が送つて来た為替です、郵便局で現金に代えて来たのです。私が盗んだと云われてビックリしました。私が父から貰つたと云うと、和尚はそれなら岐阜へ手紙で尋ねて

(四頁四段に続く)